

二〇一二年一月一六日（参加者一四名）

溪流の瀧へ且つ散る紅葉かな  
人去ればにわかに寂し冬桜  
猪垣の扉は摩訶ふしき押せば開く  
大方は檻樓引つさげて枯蓮  
この徑や石蕗街道と言ひつべし  
冬麗や水陽炎が幹のぼる  
石蕗黄なり那智黒の徑綴りけり  
一陣の風に攫はれ庭紅葉  
お茶室の座に照り映ゆる庭紅葉  
濁り池骸さながら蓮枯るる  
磊々に高鳴る水音溪紅葉  
小春日にしぶき飛ばして作り滝  
石蕗あかり溪へと下りる階に  
沢小春水かけろふの楽しげに  
首ふりて風にあらがふ枯蓮  
山荘を埋めて四圍の紅葉山  
石蕗の黄に寄り添はれをる天使像  
ぬた場またぬた場や小春日の山路  
スマホ手に図鑑代りや園小春

クラス会さながら吟行冬温し  
寒晴や庭瀧の音間断と  
枯沼にうごめく命愛でにけり  
冬菜畠日ごとに緑ふくらませ  
鉢立つるメタセコイアの冬木立  
ふらここに座す偕老の二人かな  
ぬきん出て光を集め金鈴子  
錠固く庵を閉ざして冬ざるる  
渓の秋木々に映りし水陽炎  
秋草の名をあてあひて吟行す  
谷底に届く日のあり石蕗黄なり  
園児らのお弁当タイム冬桜  
枯葉一つ迷惑さうや蜘蛛の糸  
蘭亭の簷牙に触れて一葉落つ  
落葉踏む火垂るの墓の謂れの碑  
慰靈碑に彼の名探す冬日向  
日向ぼこしつつペちゃくちや匂輩